

地域課題の解決に向けた取組

造林・保育作業の軽労・省力化と 「多様な森林づくり」に向けて

上川中部森林管理署

写真：6月の黒岳山頂

【はじめに】

上川中部森林管理署は、北海道のほぼ中央部に位置し、石狩川の源流から中流域に広がる上川地域において、旭川市をはじめとする1市6町の国有林を管理しています。

管内は山岳地を主体とし、国内有数の天然林地帯を有しており、その多くが大雪山国立公園などの公園地域に指定されています。湿地や高山帯といった特殊な環境条件のもとで成立した多様な植物群落が分布していることから、「森林生態系保護地域」等に設定し、貴重な自然環境の保全に取り組んできました。

また、大雪山系は十勝岳をはじめとする道内有数の火山地帯でもあり、山地災害の防止機能を十分に発揮させる森林整備が強く求められている地域です。

【地域の現状と課題】

全国的人工林は本格的な利用期を迎えており、令和7年度の木材自給率は42.5%と、20年前の約2倍まで上昇しました。これは「伐って、使って、植えて、育てる」という森林資源の循環利用を加速させる好機である一方、林業の現場では自然条件の厳しさなどから、新規就労者の確保や担い手不足といった課題が深刻化しています。この状況は上川地域においても例外ではありません。

さらに、上川地域は広葉樹を利用する製材工場が多い地域として知られていますが、近年は外国産広葉樹の輸入が困難となっており、地域産業からは道産広葉樹材の安定的な供給が強く求められています。

【これまでの取組】

こうした地域課題を踏まえ、当署では造林・保育作業の省力化・低コスト化を進めるとともに、針葉樹の植栽と広葉樹等の天然更新を組み合わせた「多様な森林づくり」を目指して施業に取り組

んできました。

従来、人力に頼っていた下刈り作業は、炎天下での作業となることから作業への負担が大きく、離職の一因となる場合もありました。このため、当署では、リモコン式草刈り機を活用した機械下刈りを導入し、労働環境の改善と負担軽減を図っています。併せて、その効果を広く共有するため、民有林関係者や地元林業事業者等を対象とした現地見学会を開催してきました。

広葉樹資源の育成については、北海道大学雨龍研究林で確立された「表土戻し地拵え」を導入し、令和7年度からカンバ類を中心とした天然更新量の調査を開始しました。さらに、主伐時にはミズナラなど母樹となる高木性広葉樹を一定量残存させる「保持林業」

を実施し、広葉樹資源の育成と生物多様性の両立に配慮した森林施業を推進しています。

【今後の取組】

令和8年度においても、機械下刈り作業を着実に推進するとともに、「表土戻し地拵え」や「保持林業」といった取り組みを継続し、地域が抱える諸課題の解決に取り組んでいきます。また、これらの取組を通じて得られた成果や知見については、民有林関係者にも分かりやすい形で積極的に情報発信し、上川地域全体の森林づくりの推進に寄与していく考えです。



リモコン式下刈り機での作業



表土戻し地拵え試験地の設定・調査